

妙薬博物笈

いろはに
ほへと
一

特1
2230



歷朝帝王典制記事

上下
合本二冊

明謝紹芳選

急用間合
真字引玉篇大成
懷中小本
全一冊

補正初学指南抄

毛利貞齋著
全

唐土ノ始ヨリ明ノ代ニテ代々帝王制度
事物ヲ始テ制述シ王ノ了千餘ヶ条ヲ書
集テ其義ヲ詳ニス都テ物ノ始ヲ知ヘシ

右ノ書ハヨメ又字ノ早クヨメル本ナリ
コレニテ畫引ノ本數多アレハ偏冠ワ
カラヌ字ナドハ甚ダ引ニクシタトハ早
ノ字ヲ引ニ偏冠ワカラズ何ノ部ニアルセ
知レズ人々是ニ困ルナリ此本ハ偏冠ニテ
引ヨキ字ハ偏冠ニテ引 偏冠ワカラヌ
字ハ字ノ書初メニ畫ヲミルト引ケル
コトハト畫ヲカゾヘルニ及ハス字ヲ引
至テ早レ字ヲ増スコラビタシ凡テ字ノ
モレタルハナレ平仄ヲ改メ和訓ヲ正シ付テ
幾度モ大儒ノ校訂ヲ經テ板行シ世ニ弘ム

詩材拔錦

川口西洲先生輯
懷中折本紅睡入

唐詩ノ孰字ヲ集ルコト百二十門ニ領テ三千二百句
コレヲ撰ハ花月ヲ摸出スルコト声アツテ画來ル如
詩作妙処ヲ得テ妙ク書ヲ見テ知ルベシ

朱引指南唐ノ歷代要畧見セ一史大略經書
詩文讀法指南ヲ委ク載經文出所ヲ記ルレ
都テ初学ノ為ニ成コラ集ム早学文ノ各也附錄
禁中ニ行ルコトスヘテ是ヲ記ス禁中宮殿圖說ヲ
アラヒ撰家清花羽林名家其外堂ニ官位
昇進ノ次第八省夫々職掌ヲ詳カニ諸侯方
任官ノ次第其外親王御門跡御格式官位神
社官職寺院ハ八宗九宗シテ細ニ記スヘ
テ官職ノ了并ニ唐官相當等シハレシ記ス光
文章舊語桐江先生エラム処ニシテ五經
及左氏傳ノ要語孰字ヲ拔萃シイロハ
分ニ見出スニ便利ナラシム詠物詩唐
季崎撰也終リニ附レテ詩家ニ便リス

妙藥博物筌序

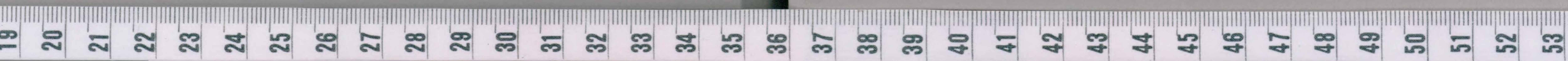
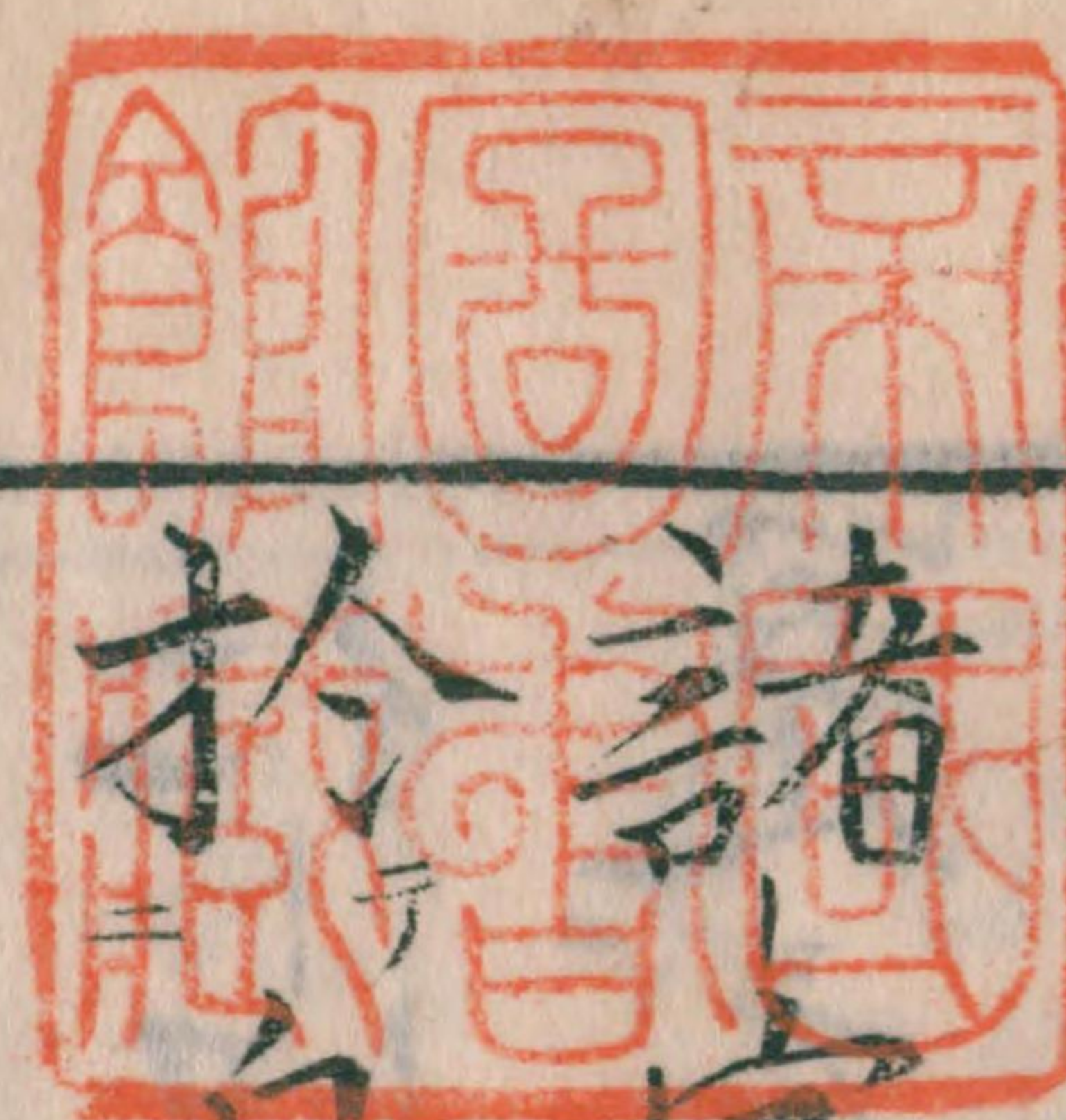
滕見隆先生著此書百探

諸家秘奧傳卓澤奇方

於自家嘗試効而採摘

經駸病名以國字別之

雖倉卒之間隨干病則



特1
2230

妙薬博物全

凡例

一、此集ハ諸家の秘方印知ある者を
其年傳受して書寫之。其年を未
見聞する而和漢此妙劑を雜記し
たり。數十卷。蓄で書函に満り。蠹臭
乃蝕んことを恐れ、眼日緋之煩を去る
精華を撮り約て一帙とし。庸醫童蒙

令得方以濟郡生是實
老波女心切也予感先生
仁沢抒欣躍之情遂題
是廣其傳焉

鳥飼洞旅用題



乃後も子解一易くうんせり。文辞と不
莊ましく俚語と以て候名も誌し。いろは
字を用て病門と分類す。同者其約下
よ於て治法と求むべし

一いろはは分れ病名或ハ音。或ハ割。或ハ和語
と以て記する者ハ俗間の流言よ從て
急率ハ搜覧よ備ふ
一齒疾 (ハ)の約 蛀牙 (ハ)の約 考れどき

各約よ粗出よりいへども。其委曲治法ハ
口中門 (ハ)の約よ示之。他者准之て

一 考ふ魚

一 楊梅瘡 天疱瘡の如き。世俗大豆瘡

及た瘡 濕毒などいへり。ともよ瘡毒

れ一類なれば (ハ)の約よ出之。如く病証ら

其全 名と舉記之。又骨痛ハ瘡毒

の條下よ載。搗骨ハ赤撲金瘡ハ約

中よ出たり。餘推類索于茲
一惡阻。胞衣不下。血証等。凡產前後乃
諸病。或ハ疝氣。風。乳癰の類。惣て小兒
乃九疾の如き。其病名よ因ていろいろの
約よ不_レ分。産前後(さ)の約。小兒門(せ)の約
よ纂述了畢

一眼目(め)の約。産前後(さ)の約。小兒(せ)の約
等の諸証。家傳の治法あり。各約よ大槩

と著すといへども快大よして周覽の煩
多_レバ。右三科の治療亦ハ附録卷出
たり共よ泰考ふべし

一諸病妙藥集。近年世よ流布者若干卷
あり。い言校合之。既板行よ出る薬方
ハ悉除之。故よ治法或ハ闕するも有り
他書よ攘りて復不贅

一諸方藥種功能少_レ似るを以て和

漢と雜る相あり。野人久た本の薬と搗
 絞方汁瘰と截薬とすれば。これを名
 けて常山本州ニ出たりとす。○於毛止の
 根蝨腰痛の治と治す。○於毛止の
 け藜芦本州ニ出たり○為味苦小兒の治蝨
 腰痛の薬なれば。胡黄連本州ニ出たり海桐法ニ瘰
 と一類とす。佐きども實ハ別種なる
 しいゆかり博達士論又功能も別なれば。

和俗誤稱する物あり。○和肉桂松浦と桂心
 漢肉桂蘇皮と刮と名け。○樟腦焼迄と斤腦
 斤腦茶店よりと云。○大風子雷丸と稱す
 梅花竜腦なり雷丸大風子別也和方癩瘡小瘡などの薬は雷丸油とりのハ
 雷丸大風子なり。返竜丹かどの劑ハ真の雷丸と月由べ
 如ば誤甚多し。大は治法ハ害あり。今和薬
 ハ和名のを記。漢名と附會する物別種
 と誤用る類。悉改之ハ集中初学士。師傳等を授
 三改ハ茶俗のか。從心ハ訂考ハ漏るるハん
 差あり今改之



しと。後人以て正之。又龍氣と玉龍本州ニ蛭蛭の別名と
玉龍と名け。素久利を船底若舟の若末久と名け。
久知草を仙人州本州ニ見たりと云類。傍人古昔
より用素る其危とかれバ。此書不改之傍よ
從名を附て知し。漢の方書と因する時敢
て混雜することなかりし
一卷中の方劑。諸家自得活機の妙術はし
て其理曉し。不徒者有之。必臆見を不加

授受のまゝは撰集す。愚對証。試用て
標教の應驗を得し。教多度也。私よ知良
醫立方之趣。廉略の事よあつ。後世の
研の薬抹羅合を經て精ぐごとし。蓋は
療の法。古人教よ七方十劑の品あり。是
病月れ虚實標本と詳審よ監察て補
字緩急の治を施さんおなり。當時尚奇
騁異て謾よ速効を求んと欲し。病沁と

不辨^{すまき}卒^{そつ}ホ^ホよ^よ薬^{やく}劑^{ざい}を^を投^なじ。大^{だい}過^{くわ}失^{しつ}と
 得^とて^て却^{くわ}る^る罪^{つみ}と^と方^{ほう}書^{しよ}よ^よ帰^きす^する^ること^{こと}を^を
 れ^れ視^し者^{しや}其^{その}思^し諸^{しよ}

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

いろはにほへと一目錄

い

- 疣^いを^を治^ちす^する^る妙^{めう}薬^{やく} 此^{こゝ}丁^{てい}ノ^ノヨ^ヨモ
- 疣^い黒^{くろ}痣^しぬ^ぬき^き薬^{やく} 同
- 痰^い子^ご石^{せき}瘤^{じゆ}惡^{あく}瘡^{そう}等^{とう}の^の根^ねを^をぬ^ぬく^く薬^{やく} 同
- 疣^いの^の薬^{やく} 同
- い^いぬ^ぬご^ごの^の妙^{めう}薬^{やく} 同
- 一^い切^{せき}乃^の痛^{いた}を^を止^とむ^む薬^{やく} 此^{こゝ}丁^{てい}ノ^ノメ^メヲ

卷二目錄

十



同

痛りつてを治する薬

秘方万治散

同

齋膏やく茶

万腫あち抱き疝はよ付て妙なり

同ウ

婦人陰中腫痛たれいこむを治す

止ニ丁ニテ

同臭氣あうきと止る

同

同方

同ウ

陰おん風ふう乃の茶

同

陰中臭氣あうきをのぞ除く

同

陰中破れ齋やくかのきと治す止ニ丁ニテ

陰中乃痒かゆを治す

同

陰囊おんのう赤あかく治つる又俄あはた成なるを治す同

い不痔ぢ此茶

同

大の咬かつるを治す

同

又方

止ニ丁ニテ

又方

同

又方

同



○ 遺精を止むる方 同

はの効

○ 嬰癩の薬 小兒おづづ 同ウ

○ 嬰癩膏薬 九五丁メ

○ 嬰癩此薬 同

○ 同押薬 赤撲よもよ 同

○ 嬰癩を治す 同ウ

○ 軟癩の薬 同

○ 秃此薬 世六丁メ

○ 同方 同

○ 減れ立返一薬 同

○ はしり痔此薬 同

○ 同方 同

○ 腫をひきよる薬 世七丁メ

○ 鼻血を止る奇妙方 同

○ 衄血并諸失血を止む 同

○ 衄血えからちと心こめ切きり疝まがと治す 同ウ

○ 鼻病えびのやまひ 同

○ 又方 七八丁メヲ

○ 鼻塞えびさき通とほぜず息いきはまるを治す 同

○ 鼻鼈えびか菜の 同ウ

○ 赤鼻あか乃菜え ざくろ鼻なもり同

○ 小兒赤鼻せうに此菜こ 七九丁メヲ

○ 小兒鼻下せうにより顔おしより赤あかくぬさげ

○ うりを治す 同

○ 鼻えびれ中ちゆうより出でる花はなと治す 同

○ 酒瘡さく鼻えびの付菜つ 同ウ

○ 齒菜え 七味散しちまいさん 同

○ 齒えの痛いたを止とめる菜え 同

○ 齒菜 七丁メヲ

○ 齒えくさ乃の妙菜めう 同

○ 齒え乃の瘡うけと治す 同

卷一 目録 十三



○ 齒の疼を止む

同ウ

又方

同

○ 齒と圓目をめやす

圓齒明目散
卅二丁メヲ

○ 齒の生る薬

同ウ

○ 齒くさの薬

卅二丁メヲ

○ 走る牙痛の薬

同

○ 齒動脱とすりを固る方

同ウ

○ 齒と脱方

同

○ 齒齧痛を止む

同

○ 齒を赤て勃と止

卅三丁メヲ

○ 肌乃魚をよくする薬

同

○ 腹切腸出るを治す

同ウ

○ 膝瘡の薬

同

○ 膝の浮るを止る方

赤白痢病よし
三十四丁メヲ

○ 肺癰治方

同

○ 池沼止薬

井流

卅五丁メ



○ 池邊止菜

同

○ 千種皮黒菜

腹の痛ニよリ
ひひのほ久痛ニよリ 同

○ はありくさの菜

丹毒ニ用

○ 白蛇散

名方

同ウ

○ 孕婦菜毒ニ中リ。子と握固絶するを治す

此七丁メウ

○ 蜂ニ螫れらるを治す 同

○ 蟻ニ螫れ疼甚止がこきを治す 同

人への部

○ 目腫の妙菜

此今メウ

○ 面皰の菜

同

ほの部

○ 骨たぐひらるを治す

同ウ

○ 接骨

同ウ

○ 同方

同

○ 骨より肉と上る方

此九丁メウ

○ 痣壓ぬき菜

同



○ 骨ぬき 喉より奥まで骨までと抜 同ウ

○ 同妙薬 竹木のこげ喉より立るるもよ 同

○ 同 竹木のこげ喉より立るるもよ 同

○ 疱瘡とせざる浴湯の方 四十丁メヲ

○ 疱瘡解毒 疱瘡とのぐるく薬なりひ方
と現れハ剥出てもかる 同

○ 疱瘡妙薬 名方 同ウ

○ 皇き疱瘡に用る方 秘方 四十丁メヲ

○ 疱瘡の妙薬 同ウ

○ 同 四十丁メヲ

○ 同名方 同ウ

○ 疱瘡の薬 同

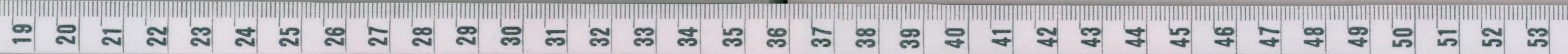
○ 同 秘方 四十丁メヲ

○ 疱瘡禁穴へ出さぬ方 同

○ 同 やととら 同

○ 同 まのあひ 同

○ 瘡疔を治す方 同



○ 疱瘡目よ入ぬ法 四十四丁メヲ

○ 又法 同ウ

○ 疱瘡の後目痛を治す 同

○ 又方 同

○ 疱瘡目の薬 四十五丁メヲ

○ 疱瘡出兼るよ薬 同

○ 疱瘡れた海りを治す 同

○ 疱瘡くさげ液ト里を兼を治す 同ウ

○ 疱瘡目へ入るを治す 同

○ 疱瘡の海りと瘡 名譽の法なり 同

○ 疱瘡のつとつうぬ法 秘傳 四十六丁メヲ

○ 疱瘡の痕を失ふ薬 同

△の部

○ 蛇よ螫れ方を治す まじりも同

○ 同法 同

○ 又方 同



○ 同 二方 蟻 蛇 犬 子 交 れ る よ の 同

○ 同 四十七丁メヲ

○ 同 其 外 毒 虫 螫 る 方 を 治 る 呪 同

○ 同 癩 疽 の 薬 同ウ

○ 同 方 同

○ 同 同

○ 同 妙 方 四十八丁メヲ

○ 同 同

○ 同 同

○ 同 同

○ 同 同ウ

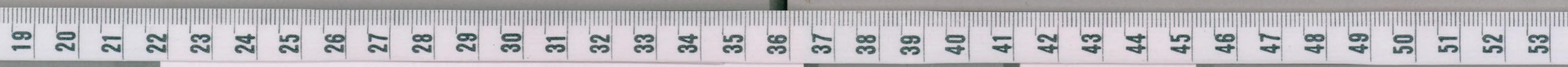
○ 同 同

○ 同 同

○ 同 四十九丁メヲ

△ 合 約

○ 雀 目 此 薬 小 兒 疳 眼 上 用 て 一 同



○ 飛火瘡薬

同

○ 簽刺拔毒

同ウ

○ 同

同

○ 同 笠屋方

同

○ 同

五十一メラ

○ 同

同

○ 毒矢の中に入ると治法

同

○ 吐逆を止る法

同

○ 吐血と治する法

同ウ

○ 同 神授方

同

○ 内損吐血下血と止る方 五十二メラ

○ 吐血と治す

同

○ 毒消

同ウ

○ 毒消 長屋

同

○ 同

五十二メラ

○ 解毒 法毒よれ及び諸毒虫
蟻れと治す

同



同 祕方

五十二丁メウ

○ 諸毒を此毒中りくるを治す 五十三丁メウ

○ 毒虫を此毒中りけるを治す 同

○ 神光飲 毒薬中り 同

○ 解毒 万病 諸毒をけし。諸毒中り 同

○ 一切毒虫を此毒中りけるを治す 五十四丁メウ

○ 毒中りくるを治す 同

妙薬博物笈卷之一

藤井巨米子見隆 纂輯

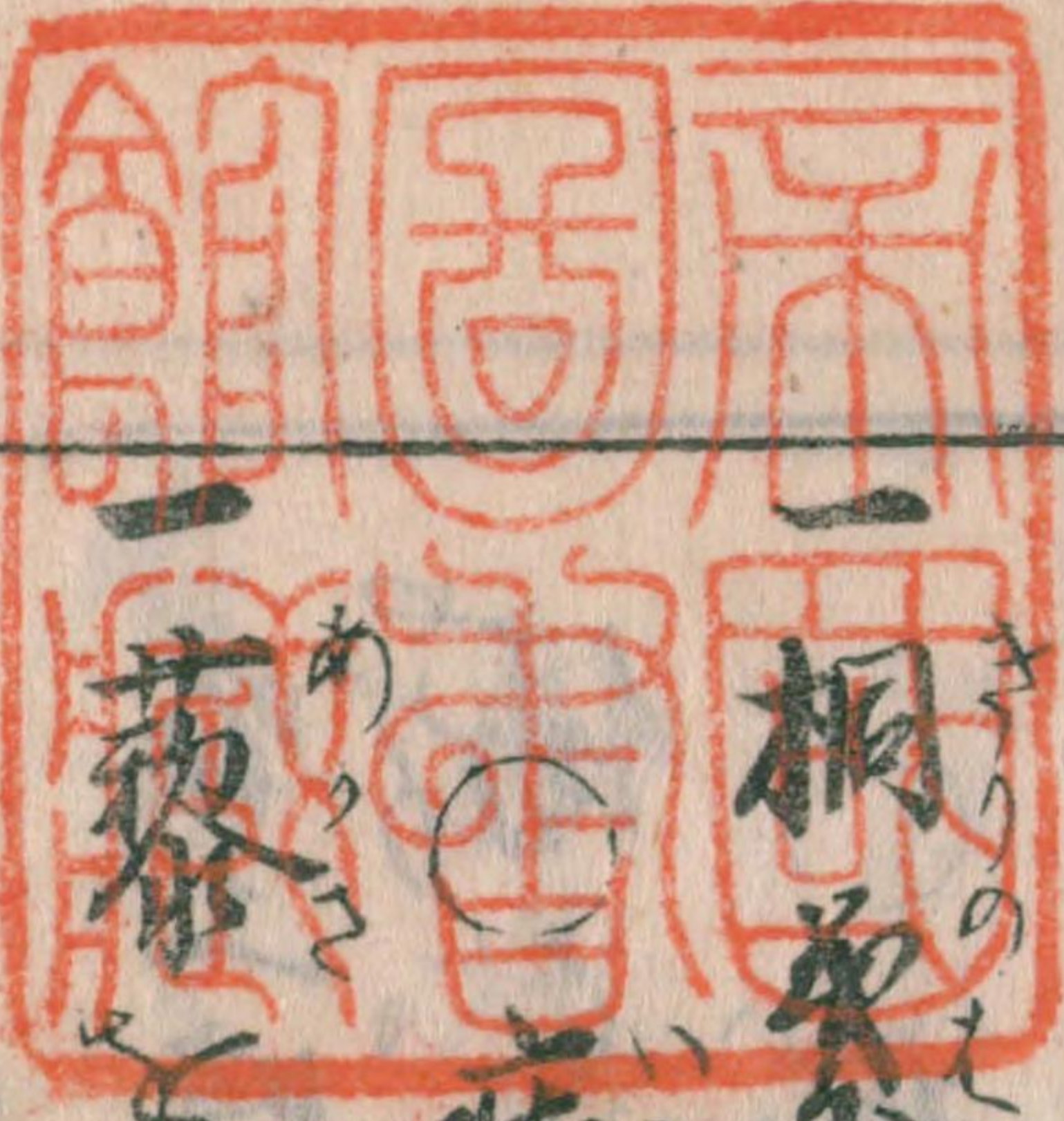
長岡恭齋丹堂 校正

○ いの初

○ 疔を治する妙薬

○ 桐葉と揉て其汁と付へ一奇妙に愈

○ 疣黒痣ぬき薬



○ 蒜と石焼しとて石灰と等分何よても蓋

此の器は酒とかりへ右に蒜石灰と揉

へ上は糯米と並べ極。又其上は右に二色と

玄。息の少しも出ぬやうに蓋をすめ。以糯米

此解^レるを^レて^レ疣^い黒^く痣^しよ^不へ^付ぬやう^よ付^べ

○瘰^い子^が石^こ瘤^ぼ悪^あ瘡^じ等^らの^根を^ぬく^茶

一^已豆^が生^まり^て 喜^い磁^の茶^碗乃^粉大

名^二味^糊よ^て丸^一を^瘰石^瘡等^ハ滅^ます

傷^や付^べ。小^い瘡^の類^ハ捻^ひけ^てよ^し

○疣^いの^茶

一^疔此^ゆで^汁麝^ち香^かぐ^一其^俵付^べ

○い^ぬご^のめ^茶

一^生麩^なを^湯す^と包^ふ吞^べ一^丸よ^愈

○一^切乃^痛を^止る^茶

一^化骨^皮粉^万の^痛を^止愈^すあり

○同

一^川烏^以 草^烏以 茶^本 薑^皮

白^芍茶^川 枳^殼各^二 又^一靈^脂 等^五

在^粉を^酒と^解丸^の三^十粒

用^ひ。汁^出る^を驗^とす^べ

○痛^と治^する^茶 万^治散^妙茶^極方

一^百草^煎 白^礬 沙^糖よ^て



解付べし。蓋よハさじ事区腰痛法の痛
を治す胸出よハ上よ付て妙なり

○瘡膏茶 万腫物疔よ付て妙なり

一 辰砂あんに 朱あま 炉耳石ろかにせき 寒水石かんすいせき

滑石くわつせき 何仙茶わせんちや 白緑はやくろく 括樓根くわつろこん

綠香ろくかう 肉豆蔻にくづかう 枳粉けいふん 各粉かくふん

一 仙人草せんじんそう 車前子せんぜんし 日赤冬にっせつとう 石菖せきしょう

本丸本ほんわらほん 長なが 蓬ほう 長なが

右六味よ多四律入茶つめく二律と一それと

漉て其汁をろを湯へ入煮てみ合とさし

又布よて漉おの粉茶と松脂しょうじ 百目ひやくもく 唐境たうきやう

と入煉時炭火と和りよそろくと煉べし。

火つよけ色の焦つくななり。け膏茶疔腫物

くすり何色も瘡すとりひりな

○女陰中腫痛を治す

一 心こころ 焚たき 大黃たいかう 甘草かんさう

細末さいま 麩あつめ 乃大丸のたいわん 布ぬの 包陰中つこいんちゆう へ入包

○女人陰中れ臭氣を止る

一沉香を最上の碎すりて解陰中へ入べし
肉菜にくさいも沉香ちんこうとかり用てし

○同方

一友瘤ゆうりゅう 竹の虫しじく 糞くそ 丁てい子し 各それぞれ等ごと分ぶん

右合みぎあひし雷らい丸がんの油あぶらよて付つべし

○陰いん氣き乃の菜さい

一多葉粉たはつぷと水みづよ浸ひし。其汁そのじゆを付つて一夜いちや置おべし。虫むし赤あかくなり死して活いるなり

○陰中臭氣いんちゆうきを除のぞく

一八月はつがつは樓む突つの赤あかと丸まると合あへし治ちす

○陰中いんちゆう彼かれ齋さいがさきと治ちす

一石炭せきたんを煎せんじなく洗あべし。又また雄お黄わうを

粉こなしね拾ひりかけべし

○陰中いんちゆう乃の痒かゆを治ちす

一蛇へび床とこ子ご 的てき 焚たき は二味にみ薬やくと洗あべし

附つ子ごと的てき 焚たきと粉こなしね拾ひりかけるも佳よ

一楮こ子ご粉こなしね拾ひりかけるも佳よ 二味にみ薬やく

金きん箔ぱくを加くへく日季せきよ一七しち日にちづく服はくする也



年々少づ減すべし。茶お應すれハ陰
囊濕るなり

○陰囊赤り潰り又ハ俄ハ大ニ成るを治す
一桃とすりて薬糞此けよて付べし

○いが痔此茶

一蠶 痔とあがり酒をいが痔よ二三度

付て其後指よて此茶を付べし。腫物ハ酈

よて付へし此茶ハ腫物を托又愈も妙也

○犬の咬るるを治す

一疔瘻とありよて解付べし

○又方

一蟹の腸乃黄なる物と取て付べし

○又方

一杏仁とすりて付べし

○又方

一石膏此粉を付べし

○遺精を止むる方

一黄柏四両一両ハ童便よ浸し炒一両ハ

塩多し浸し炒。一まの乳は浸して炒。一
まの生よて用立よ細末し煉蜜よて煮實
の大きよたど空ふよ二十粒かど酒よて飲べし
其効速なり○又硫黄一塊皂莢と塞へ
し即止るりのなり

〔はの効〕 齒に於中この効を考へ合すべし走痔ちの効
あり。癩癩りの効を考へ合すべし

○栗瘕の葉 小児のなつどし

一炭粉をよく煉て膏葉のこくは栗瘕
れよ付並べし。愈て後己と葉とれるなり

○栗瘕膏葉

一葶 烏貝 鱉 各 煮よして

右松脂よて加減よく煉て付べし。愈らよてとらす

○栗瘕の葉

一田羸 松緑

松脂 細く入る

右松粉よしす糊よて作りませか
火よてあつめ付べし妙なり

○栗瘕押葉 赤撲よもろし



一薯蕷

薯蕷（すうご）を煮す

擯（びん）柿（し）子（こ）粉（こな）

かき入

右を腫（しむ）らる海（うみ）りり（りり）に付（つ）べし。燒傷（やけど）も竹虫（たけのむし）

糞（くそ）と（と）か（か）し（し）加（か）へ（へ）く（く）よ（よ）し

○更瘧（しやう）と治す

一荒布（あらいぬ）

蒜（にんにく）大（だい）

蒼葱（そうそう）

中（ちゆう）

煤（すす）中（ちゆう）

う（う）か（か）く（く）べ（べ）し

○軟癰（なんよう）の茶

一ス（す）から（ら）根（こん）殻（がら）と（と）才（さい）分（ぶん）は（は）刻（きり）肉（にく）と（と）死（し）て（て）皮（かわ）と（と）平（ひら）

め（め）糯（もち）米（まい）の（の）飯（い）と（と）搗（つき）爛（らん）し（し）根（こん）殻（がら）の（の）肉（にく）は（は）ぬ（ぬ）り（り）て

軟癰（なんよう）の（の）口（くち）は（は）何（なに）て（て）盛（も）べ（べ）し。其（その）膿（うみ）出（で）る（る）は（は）任（まか）せて

根（こん）殻（がら）と（と）丸（まる）べ（べ）か（か）ら（ら）沃（お）自（おの）愈（の）○又（また）鷄（けい）子（こ）殼（がら）煨（や）て（て）末

し（し）と（と）す（す）ね（ね）の（の）海（うみ）り（り）は（は）塗（ぬ）へ（へ）し（し）即（すな）ち（ち）飲（の）み（み）て（て）瘡（かさ）

○秃（か）此（こ）茶

一菊（きく）糸（いと）

荏油（じんあぶら）

小便（せうべん）此（こ）を（を）り

楊梅皮（やうまいい）

鴈（かり）此（こ）と（と）あ（あ）り（り）油

右（みぎ）すり（すり）合（あ）て（て）洗（あら）ひ（ひ）二（に）三（さん）夜（よ）付（つ）べ（べ）し

○同方

一鮓（しよ）

河豚子（かぶこのこ）

若參根（わくまのね）

香（かう）箱（ばう）

右胡麻の油よて煉合付べし。白朮あり
はく洗ひ毛と抜く付べし

○減れ立返し菜

一 串棟と煮し用

○ちりし痔れ菜

一 又倍子の粉と蔦菜一くかど刺。何よて
も病人れ好次物よ用せべし

○同方

一 黄連 藜烏頭 荊芥 槐花 石菖根

右各を分耳州少く加へ煮乃こく煎し用

○腫とひきよる菜

一 紅苧 葵れ葉 苦参 二味

陰乾よして粉よし。合せ付べし

○鼻血と止る奇方

一 椶櫚乃毛と短く切鼻の穴へへし。立返よ止る

○血血并諸失血と止む

一 卒丸竅四肢の指の岐より血濺が如く
ある者有り是暴る驚より致取なり

これと治すり法。其病人は初しじらるるをく
井花水と面は嚔べし血即止る衄血よを
効あり 按ニ右ノ証ニテモクミタテノ水ヲ面
ニサツトカケベシ 衄血と止切疔と治す

○衄血と止切疔と治す

一 欬を花陰干しして粉し舌の上よ

がし密べし止るる妙なり

○鼻病

一 鼻ハ清氣お入の道より肺和し調る
時ハ香をかき上焦熱する時ハ鼻の先赤く

鼻の内よ瘡生じ見よきと酒釀とみ。外
よハ牛の耳れありと付内葉よハ山梔子
黄芩 陳皮れ煎じ汁を刺す

○又方

一 黄蘗 苦参 栝椰子 香薷末

解合せ付べし

○鼻塞通ぜす鼻つままるを治す

一 同通丸

葶藶 薄荷 荊芥

右末一蜜よて丸一口中よ食ふく和じやう
して汁と飲べのむ

○鼻はな 艷えん 茶ちや 鼻塞はなづまり 細の香さいのかう 不入ふじゆ 或鼻中あるはなちゆう より

一甜丸てんわん 蒂てい 粉こな 麝香せきかう 少加せうか 蜜みつ よて ○こ

の夫この 丸まる 綿わた 包つづ 鼻はな の孔あな へへへ清きよ 洗せん

多おほ 出い と 多おほ 愈い る 邪よこ の ごとごと

○赤鼻あか 乃の 茶ちや ざくろざくろ 鼻はな もり

一硫黄りゆうわう 細辛さいしん 乳香にゅうかう 粉こな 各おのづか 等がう 分ぶん

右みぎ あよて 解と 合ご せ 付け べい

○小兒赤鼻せうじやく 此茶こちちや

一黃丹わうたん 雄黃ゆうわう 二味にみ 等がう 分ぶん 粉こな よい

あよて 解と 合ご 付け べい

○小兒鼻下せうじやく より 顔かほ 小せう 赤あか く ぬぬ ぎ け

うう と 治ち す

一阿膠あくわう 阿仙あせん 茶ちや 粉こな よい

あよて 解と 切き 付け べい

○鼻はな 此中こちちゆう より 出い づづ ろろ 物もの と 治ち す

一蘿藦らふめい 味あじ 粉こな 猪ぶた の 油あぶら よて 付け べい

七九

○酒渣鼻の付薬

一 鷓鴣屎くそを合臘ろう月の猪脂じゆよて和くす
毎夜鼻よ塗ぬべし 或ハ酢すよて解とけし

○齒薬

一 藜あわび七味散しちみ沉香しんこう心藥しんやく

一 昆布こんぶ梅干うめ耳薬みみ

右細末さいまつ一楊枝やうじよて付くべし

○齒の痛と止る薬

一 茄子蒂なすびのへた焼塩やきしほ加へ付くべし

○齒薬

一 肥こ滑石くわつせき燒やて 竜腦りゆうのう

右粉こなよ一ひとろよて練ね付くべし

○齒くさの妙薬

一 苣荳じゆとう耳みみ粉こな一ひと燕つば糞ふん

くさよ鍼はりと刺さ其その所ところへいは薬やくと一日いちにちよいちじよいちにちよ付くべし

○齒の疼と治す

一 刺さ前ぜん葉えつの汁じゆよ 蘇そ合ごう竭けつをままませせて

疼いた方かた此こゝ耳みみへいへい

○齒の疼を止む

一白楊皮（まゆばの皮）と細糸（いと）一酢（す）と熱（あつ）て一夜（ひとよ）の白楊皮（まゆばの皮）の粉（こな）を白（しろ）くどづく海（うみ）せ合（あ）口中（くち）は會（あ）暫（しば）して飲（の）む

○又方

一鯽魚（うなぎ）一ツ腸（ちゆう）と玄腹（げんぷく）の内（うち）へ塩（しほ）を一（ひと）まいよ入（い）炭火（すみび）よて焼（やく）、煙（け）透（と）し紅（あか）なり煙（け）の盡（つき）つらと候（うかひ）て此（こゝ）の上（うへ）は磁礮器（やきりの）類（るい）と蓋（かき）よして冷（ひや）つら時（とき）細（こま）く研（す）て貯（たくわ）へ磁（ま）へ一（ひと）齒痛（は）

處（ところ）よこれと搽（す）つけく即座（すぐざ）よ治（な）す

○齒と固目をめやす 固齒明目散

一槐（あし） 枝（えだ）多（おほ）くも 川柳（かわやなぎ） 枝（えだ）多（おほ）くも

右二味（み）丸（まる）よ枝（えだ）ハ細（こま）く削（け）糸（いと）ハ刻（き）一棒（ひとぼう）づ桶（おけ）よ入（い）めを浸（ひ）こよして一日二夜（ひとひふよ）浸（ひ）し煮（に）じ濃汁（のうじゆ）出（で）つり時（とき）濾（こ）て渣（くず）と去（い）去（い）其中（そのうち）へ白堊（びやく）を多（おほ）く白堊（びやく）を搗（お）ろり捨（す）濁（にご）よ入（い）煎（せん）じ煙（け）の立（た）まで炒（あ）茶（ち）研（けん）よて細（こま）くねろり磁（ま）なり。丹（に）やうハ粒（つぶ）夕（ゆ）楊枝（やなぎ）ハ付（つ）齒（は）よぬり口（くち）は唾（つば）たまりつら



と齒のろへ紙地をむじやうよすべし。おろぎ
附石の口よたまりくる蜜よあを合添其汁
よて目を洗へべし。不引久く用ざれば効あ
らず。右二色糸なれば附搦るよハ板平よても
くるしかり次

○齒の生る薬

一 吸芳 地黄 茵陳 芍薬 白朮
沉香 耳草 山茱 杏仁
右粉よ一箱よ包うらあし。齒齧と洗へべ

一 又老のどくせん一用由

○齒くさの薬

一 昆布 藜 白礬
茄子蒂 杏仁 乳香 耳草
右粉よ一して付へし

○走る牙痛の薬

一 蚕退紙 蚕のふれ付うら 黒焼よ一鹿射香少
ばうり入蜜よて調付へし。白礬をかり加へ
うるむ妙なり。又蚕脱皮と研末傳も佳也

○齒動脱しすりを固る方

一 芦薈を粉よして。先塩にて動齒の根と摺水にて洗淨。右の粉茶と傳へ。

○齒と脱方

一 小と付ずして齒を取よハ。草烏頭 華

揆 各ハ 山椒 細辛 各十 右細末し少許

脱し思入齒の内外は措付べし。其齒自落

○齒齧痛と止じ

一 杏仁 一ツ皮粉 塩少入水にて煮くよ味

出ると去く杏仁を口中は含べし。いま止
ざれば吐出。又右のどくこし入ると
含じ三夜がどもて瘥なり

○齒を赤て動くと止

一 茯苓根と焼灰よして動齒は貼ハ即卒

○肌れ患をよくする薬

一 绿豆 白附子 滑石 白芷

取 龍腦 白檀 各をぬ

右七味末して身は傳。浴とき洗へ



肌養玉乃ごり

○腹切腸出らると治す

一 黒猫爪 唐蠟 桐子油

右之味煉合つけべし

○同腸切らると治す

一 雞乃血と付べし 瘡

○膝瘡の薬

一 藤角 黄柏 山梔子 各等分

右之味煮して搽かけべし

○腹の浮と止る名方 赤白痢疾よし

一 罌粟 肉桂 錦大豆

人参 于姜 其草

右抹して罌粟 取草 葱湯よして用也

べし 腹痛瘕と氣味ありきよハ 芍薬

又黄連を加へてよし ちち腹よて圓よ居

よくきよハ蓮葉と粉よして加へべし 産前

小ハ干姜と除て香白芷を加へてよし

○肺癰治方



一い証ハ胸中隱痛咳嗽ありて膿血と吐
 姑ハ唾腥臭後ハ膿とある也。氣喘て外
 してあつハさるハ葶藶子三枚黄芩二枚炒
 粉よして●は火さよ丸一撃二十と水三盃
 入三盃煎ぐは茶一粒づへ再び煎一盃
 よして服すべし。○腸癰の灸法。右の肘を
 屈て肘尖銳骨ハ左右各百壯不と灸す
 へハ膿血と下すこと多して瘡なり

○世浮止茶 赤井流

一肉豆蔻 計分 干姜 計分 厚朴 計分

一罌粟 一枚 甘草 一枚

右細末一飯の湯よて用せべし

○世浮止茶

一罌粟 一枚 干姜 一枚 木香 一枚

一甘草 一枚 肉豆蔻 一枚 黄连 一枚

一厚朴 一枚 黄芩 一枚 白朮 十二粒

右各粉よ一飯湯よて用 按ニ右二方脾瀉日久者ニ用ユベシ

○千種皮黒茶 腹の痛よよ一瘡よよ一

一 蒼葱根 黒焼より一味白湯にて用

○ はちりくされ菜 丹毒に用

一 灯心 黒焼 連銭草 黒焼 赤小豆 粉じ

右何色も等分より一研よて付べし

○ 白蛇散

一 蟻 頭と玄皮をたぎぬりかきやど洗ひ。腸と玄一煎酒に浸し。陰干しして碎き黄粉にあらりまを白粉より

麝角 白焼 麝香 部分より

右三味細末一皮を空ひよニツツツやつて用也

右効能 并ニ吞汁之傳

一 雞産 小ハ 薏苡仁 桔梗 杏仁 芍薬

右乃散薬を服す

一 産後乃眩暈。又ハ産後此上氣者ハ味

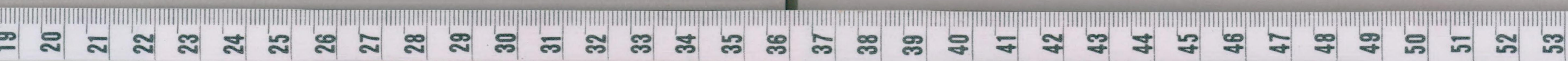
汁よて用也

一 胞衣 小ハ 益母 加ハ葱一用也

一 赤腹 志乃り 腹小ハ 罌粟殼 芍薬一用也

一 水泄 小ハ 白痢 芍薬一用也

食のちり湯よて用也



ても癩草乃汁なりとも竹筒入飼べし

一 かいらよの酒を温飼べし

一 息合よの舌よぬるべし

○ 孕婦、菜毒中り。手と振問絶すと治す

一 白扁豆、生皮とめ、飯のそ湯にて用て炒なり

○ 蜂よ、螫れ、つるを治す

一 女竹、此葉と手一朶よ切。三朶よあ、三件

入て式株よ蒸し、用由べし

蜂よ、螫れ、疼甚止め、さきを治す

一 蜂房と細粉、猪脂よて解付べし。立延よ治す

にの効

○ 日腫の妙薬

一 櫛の本此皮、黒焼よし、て白湯よて用

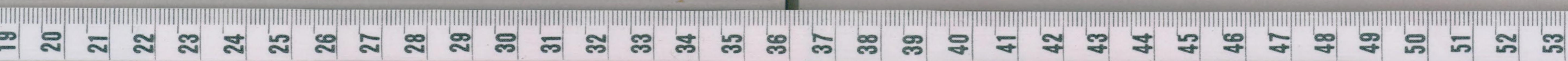
又、刻齒にて用もよ。又方男、丸女、右此臂、此

肉、此目の美中、より血をとるべし

○ 面皰の薬

一 密陀僧を粉し、婦人の乳汁よて解。寝

さまくよ、顔よぬり。的物洗ひ、あすべし



かやうよ二三夜あへ四々夜よて恙愈る

ほの部

○骨たぐひうを治す

一楊梅皮細末一土竜の黒焼と等分よて梅漿よて解切付べ

接骨

一骨つきよハ右の茶と梅干の肉よてねん付其上と柳の皮よて巻なり

○同方

一楊梅皮 其ま

○ 沉生

○ 輕粉

○ 瓢

○ 赤

○ 赤地利

右粉よ一緝屋の糊よて押合骨此れ

うらあよ付べ。其上を楊柳よて巻

一。以法食ずとりるぬ

○ 骨より肉をとる茶

一 煎茶と粉よ一乳よて付べ

○ 瘰癧ぬき茶

一 瘰癧よても厭薫よても其上と竈の土よて

すり乾し。丹礬を粉よ。水よて舂べ。

○骨ぬき 喉の奥を此骨を立らると抜方なり

一家物と算ともは飯糊よ押合せ眉の
らよ然よて強べし妙なり

○同妙薬

一の礬と白湯よて用ひ妙なり

○月 竹本のとけ喉よ立らるよも

一棧れ突 うげがー 牙此粉

右二味 ホク・皂粒よ丸よとき一粒と赤

て用ひらなり

○疱瘡をせぬ浴湯の方

一梨木 七本 柿木 七本 一葉よ切

赤小豆 七粒 鼠糞 七粒

右四を白ろと盥乃蓋よてはくり七盃入

灸ト水よさすなり

○疱瘡解毒 疱瘡をのへるく薬なりい

一亀門湯 或家此秘密の方也お傳しためす

男子よ用ひ方

唐大黃ハリス 黃芩セリ 甘草セリ 焙カク

右三味細末し。用ゆの時ハ箱キタに包ツクこウ

出し。六夜も七夜も用ゆ

女子メノコに用る方

唐大黃キム 黃芩ニ 甘草ニ

右月ツキ方

○ 瘰癧レツ妙ニ茶チヤ 右方

一土龜クウヤキ 金箔キン 二枚

右二色糊マシにて。是コノ瘰癧レツに丸マし金箔キンを以モて

夜ヨに一粒づつ月ツキのツキべベに

○ 瘰癧レツに用る方 秘方

一 大オホカ子コ 右ミ方 土器ツキに入イ炭ツ火ヒにてマシ一ツ寸ツ長ナくマシ十ツ粒ツ相ツ

九ツ川ツ松ツ思ツくマシ燒ツるマシ時ツ分ツ黍ツ梨ツ子ツのツ 自然ツ汁ツにてマシ漬ツ

麦マシのマシ皮ツをマシ右ミ同ツ方

土ツ龜ツ 四ツ尺ツをマシ去ツ大ツ腸ツとマシ去ツ長ツ沈ツへマシねツ

南ミナ天ツのツ系ツ 右ミ方 黒ツ燒ツ

右細末しマシて挽マシ茶ツ一ツ寸ツ長ツ用ツゆ。香ツ汁ツハ天ツ目ツ

は多マシ量ツをマシいマシ入マシ水ツ分ツはマシ煮ツす。但ツしマシ右ミのツ月ツへ

金子を煮入て煎ずべし用由の時焼塩少
加へ用由。川芎此粉赤の黒茶よ之が一入也

右川芎の粉ニ下焼し不がし入云及子用
但し糖き 煎煮よハ不子用

○ 煎煮の妙茶

一金箔 上々 寒紅 取れあゝ

右等分他一ありハ少也。右三を多よて
ねく煉合。是糖よ丸。金箔をい
衣とす。以丸茶煎煮の初やこよ二粒。香
汁よハ其用る人の肺結をありてあり

用由。但煎煮なれば陰分かりし。たゞ煎煮
よてな。此も右。後よ其難と此が。右れ茶用
ゆるるよハ外の茶と用事なれ。右の方因とす
しうする茶なり。又煎煮煎煮よて黒糖煎
脹かぬらよも。以丸茶と用ゆき。糖煎煮。色
と能く煎と出。煎煮かろくはくがなし。
奇妙の秘方なり

○ 煎煮の妙茶

一 黃牛の口一 義本 加へ

右丸一 金をくるといふ衣と次

○ 疱瘡の処方

一 寒の中麻れ脊骨乃右血

一同 右二味等分一日三夜オド

づ用の四季ともよ薬生よ用てよし

○ 疱瘡の薬

一人参 紫葳根 甘草 耳草

艾葉 乾松茸 茯苓 合身

右水と食碗よ一盃半入七分よ羹用る也

○ 疱瘡の薬

秘傳

一生雀と白角し丸とを切て金箔及土器にて

息と蒸て黒焼よす。あまてりつ用べし

○ 疱瘡禁穴へ出さぬ薬

一 熊膽 橙

右末してあまてときて目鼻の廻り其

外禁穴こよぬるべし。毛をぬりて入へハ

○ 疱瘡毒熱付用る薬

一 兎の糞 十二月よ 味

出ぬなり

癩熱かんとりのと其まき月也まのあつて。肝風かんふうと拂はら入いを
りやまらなら。

○同癩熱の時まのあつて眉間へ付菜

一 雲石せき英えい 其まき

朱しゆ 其まき 其まき

大黃だいおう 其まき

雲草根うんそうこん 其まき

右四味みぎよしみ 能よと粉こなをまして見み入い水みづをまて解と眉間まのあつて

よ付つきまバ癩疹かんとりのともよかるら。大秘方也

○癩疔かんとりのと治ちする言

一 癩瘡かんとりのの中なか黒くろく大おほなるをまの或あるハ臭くそ者ものある

ハ是こゝ癩疔かんとりの也なり急いそよ治ちせされバ死しす真珠まゝ

ハ粒つぶ細こよ研す別べつよ菟豆うづ 四十九粒 乱髪らんぱつ ま

右二味みぎふたみ 黒燒くろやきをまして細末こま。真珠まゝと一ツひとつよ合あ

胭脂あじ汁じゆをまてゆり膏かうとまかし癩疔かんとりのよ付つべ

。即時そのときよ色紅いろにありて効きうあり 按ニ真珠ヲ研

二切内ニ真珠ヲ入ルホドクホニラツテ。真珠ヲ入テ豆腐ヲ合セ
灰ニウツニ上ニ炭火ヲ置ベシ。豆腐煨シ乾タル時、真珠ヲ取
出シテ乳碓ニ入研ベシ。如此ニスレハ碎ケヤスキモノナリ

○癩瘡目かんとりのよ入いぬ法

一 牛蒡ごぼう丸まる實じつ か炒あぶてます 天目てんめつよ水みづ一盃いっぱい

一本入草を煎じ湯を以て目よぬるなり。洗ふ所
湯蒸よしとよし

○又法

一發熱の時寒乃紅と目の洩り。脈
付べし其処へハ出ぬなり

○疱瘡の後目痛と治す

一本丸の破と目へ入るべし

○又方

一蝙蝠の血と目中へ入るべし

○疱瘡目の茶

一烏貝をよく本氣と洗ひ炙り其汁を
こす。又烏貝の肉とすり山椒味吻と付て
焼味吻とすり肉と食すべし

○疱瘡出兼るよ

一松茸と陰干しと一すは切之を天目
よ一をい入草を煎じ湯を以て目よぬるなり

○疱瘡れたまると治す

一松茸を乾て粉し。加こあよて出付べし



○ 疱瘡くさけ油てらぬりとあま葉あはと治す
一 松茸の石つききり粉こなより振出ふるし月つきゆじ
其まき出るをのたうり

○ 疱瘡目へへると治す

一 鮫しやまと倒たひより尾おしと切きりて血ちとそり。焼やくんよ
其血と付て目よさすべし

○ 疱瘡の海うみりと瘡いさ 名譽なごの法はなり

一 鶏卵たまりごの白しろとあれねて付くべし。何なに程ほど穴あなぬく
とも是これを入れいれば下くだより瘡いさ肉にく上うり瘡いさ

○ 疱瘡のつらぬ法 秘傳

一 起脹やまあけしまひて後あと。家鴨卵あひろのたまご此こ白しろをそり
顔かほよあらずぬりまべし。乾か次き水すいよかろ
くとこれこれを瘡いさつらず

○ 疱瘡の痕あとと失人菜しつじんさい

一 白粉おしろい 十五ご蛇骨あやこ 三さん五ご 蛇粉けいじん 身み五ご 葛粉くづのこ 五ご ち
右細末みぎこ一ひと大根汁だいこんじゆとあらりて解なつけ。
乃すなはちちて産うみます。亦またよあらりてあらす。

へ部の部

○蛇咬 蝮れらるるを治す まじりも月

一 蠅頭しのがしらとすりて粘ねりり押おしませ付つ。紙かみよてくさ

すべし 一方ニ蠅がラウラシカサシ置おべし。毒どく氣き出でテ怒こチ愈な

○同法

一 うつぎのニッ葉はとすりて塩しほと海うみせてとこ

けと出でし付つべし

○又方

一 麩あ鴨と 黒くろ燒や 硫い黃わう 少すこし加くわへ粉こなよて付つべし

同 此こ方は蝮へび蛇び咬かれらるるに

一 蛭むし刺さ 糞くそ 塩しほ 少すこし入いり研すて傳つべし。非ひ効くわうあり

又方また化ち榆ゆと粉こなよし一日いちにちニ夜よ服はくし

咬かれらる處ところよもば粉こな葉はと付つて愈なるなり

○同

一 楊やう葉はととこて付つべし。又方また回た螺ら 薑しょう

等ら分ぶんよすり酢すよて解とけ付つべし。又方また掃あ菴ら

の汁じゆ也なり。又また薑しょう 牛ぎゅう膝せつ すり合あ付つべし

又方また蕨わづとすりて付つべし

○同 其その外ほか毒どく虫むし蝮へび咬かれらるるを治なる呪まじ



一 小刀先にて其贅をとりて(や)の字を書け

○ 癩瘡の薬

一 泥鯁どろぢやう 生漆きさく

右二味押まぜ 痛み付べし

○ 同方

一 松菜しょうさい 女松メノマツのさよふし六月 松まつれ若葉わかば

矢薮やの笹ささ 右みぎをよめて付べし

○ 同

一 地竜ちりゆう 味噌みそ 各それぞれ黒焼くろやき 付べし

○ 同妙方

一 乾白柿けんぱくがしを核こゝろともよあをよいし。糊ろうもろと等らう分ぶん

よま搥こて指ゆびのあきあきをなくなく擦すりぬべし。痛止いたしり

妙なり。たゞ八日を経て腐くさるるよても愈いふ

○ 同

一 粟あわむめ殻くわをよあをよいして柿か乃の郎らうまで煉ね付けべし

○ 同

一 枳あしむめ殼くわをよあをよいして柿か乃の郎らうまで煉ね付けべし

○ 同



一 揚梅皮 蛇骨 苦か梅子此肉にて煉付べ

○同

一 百州 麩 味 餅にて練合付べ 痛止

○同

一 芍薬 浅黄 仔二重一寸四方を截少焼
細末し 鉄粉にてとき付べ

○同

一 李れ 熟せると黒焼は。朱少入細末し。
胡麻の油にて解付べ。痛立処止

○同

一 松の苔 黒焼 蚯蚓の乾るを搗ませ付べ

○この部

○ 雀目此茶 小兒痲眼に用てよ

一 車前子 此黒焼を粉よして鰻れをひきよ

かりかけ用也

○ 飛火 瘡茶

一 芍薬 芍薬 大黃 甘草

右 蘇系茶の汁にて付べ



○發刺拔菜

一 括蕒仁粉 ハハロウマンノコ 蟻蛸乃鴈ケリウは押合おしあはせて付上

ふ乾鮭クワシ乃皮ウシとめここはするなり

○同

一 樞クワの實ミと黒焼クロヤキよして油アブラよて付つけべしそが刺さ忽たち拵ぢ

○同 笠履方

一 かい草

乾して焼酒みて

きれ茶

葛クズの粉こな 香木カウキ分ぶん粉こなよする

右之味内茶なり。付茶よハハ月ハハツキと何なり

こも一味付へし

○同

一 牛膝ウシノヅの根ねと嚙爛ウチタラシして付べし

○同

一 櫻オウゴンの實みと六月土用どようよそり陰干かげかしよして密ひそ糊かよ押おませ付つけへしぬけるなり

○毒矢ドクヤよ中なかアあらる時とき治ち法ぽう

一本いっぽん綿わたを其その疵きずはよあつべし毒氣ドクキ滯ひるなり

○吐逆トキラクと止とる茶

一 礞石 木と葉と根と、おろしして

白湯よて用由

○吐血と治する法

一 白芨一味粉より飯の湯よて服す極て

ゆなり。或ハ童便よて服するもよー

者ニ用テ
を妙ナリ

○同神授方

一 昔一人吐血氣促驚躁目直視するよ

ハ方と夢よ見たり用く即愈

益智 五 辰砂 四分 麝香 五分

細末して服す

○内損吐血下血と止る方

一 内損よて吐血下血。又大酒の後口鼻

耳前後の穴より血湧がごとく出るよ 側柏

葉 十五 蒸 荊芥 十五 煨 人参 十五

右細末し服する夜よ死羅麩三斤と右此

粉菜三斤と拌合せ水よて粘り啜服す

○吐血と治す



一唐九大黄 細末し 生地黃の自然汁一盃
を温め 大黃一七つ 空服よ用也 一日二夜
つ月て血即止

○毒消

一藍の莢 二五

山梔子 皮と去き取

右細末し 湯よて用也

○毒消 長登

一菊の石 破よ一夜浸

此一葉大秘傳あり
かいたんの玉 寒の水よ
浸しき

乾粉 五分

金薄 七枚

右細末して ● 是やどよ丸し用也

一食傷者よ強く死入る時ハ 畏焼よし口を

割て入秘事なり

○毒消

一腸金錠

痢病 淋病 宿食 酒毒と消

眼子菜

十月 六月四日ニ丸一夜氣よわて陰下

山梔子

生粉よし三五

右二味 飯丸よし七夜よ 金箔とす

○解毒

諸毒よふれ 及び 瘡の毒虫よ蝨れ
うろと治す

一 眼子菜 十五
一 右二味粉よー糊よて栝桐子れ大さよな
白湯よて用由

○ 解毒 秘方

一 紅梅花 五
萬苴續尾とよを由

藍草 土用此 香等分

右三症ともよ別こよ炭焼よして調合
毒よ中りする時二三分づ用由すべて一切
れ毒と消し諸れ食傷よ白湯よて用由

れハ或ハ吐或ハ瀉して愈

○ 諸毒此毒よ中りすると治す

一 白扁豆

冷多よて用てゆなり

○ 毒虫此毒よ中りすると治す

一 香白芷 蒸ト用ても香

○ 毒菜よ中りすると治す 國光飲

一 毒と食しする者ハ胸腹こなり痛蟲咬

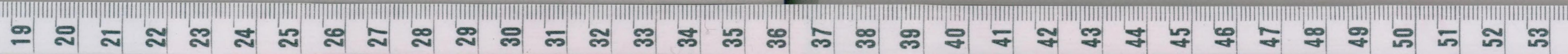
とく血と吐はる肝のどく也



へ吐て見へ〜唾を吐くハ毒なり。浮ハ毒よ
あ〜次。又の礬と合じよ志ぶ〜次味耳
きハ毒也。是よハ白礬 或分 車州 或分
と相末〜ありて用べ〜。黒き涎と吐く活
○ 神仙解毒百病丸 諸毒をけし。又後毒の中り
日數経るよよ〜
一續阿子 或分 大戟 或分 又倍子 或分
山慈姑 或分 麝香 或分
右粉よ〜糊よて●是やどよ丸〜十粒〜
白湯よて用也

○一切毒蟲ハ救虫〜る薬
一毒代黒雄黄 粉よ〜 粉汲水よて服すべ〜
○ 毒の中〜るを治す
一食物乃毒の中〜る時ハ雞屎灰よ焼
てありよて少許服すべ〜 ○ 臭の毒の中〜る
陳皮と濃茶と飲くとよし ○ 硫霜石の毒
巴豆ハ毒よ中〜るハ藍根と砂糖と合せ水
よて服すべ〜。又薄荷の汁と合へてむよ〜 ○
附子の毒よあ〜るハ黒豆汁 防風湯 田螺搗

卷二 五十四





碎き水よて飲べし俱よ効あり○一切薬毒
 よろしくハ耳草黒豆漢竹葉等水一
 盞入煎服す○服薬過度煩悶死せんと
 するを盞を搗て汁と丸散盞服すへし。藍
 をき時ハまゝ深の絹布と水よ浸し汁と
 絞るあして飲も亦佳なり
 絞るあして飲も亦佳なり
 服スルニ宜し。若熱シテ服スレ
 ハ毒愈盛ニナルヘシ慎之ヲと々

本朝軍器考

新井白石先生著

全十冊

同圖式

同著全四冊

軍器要法

岡崎良梁著

上下合本一冊

武人訓

全五冊

武門ノ教誡上君王ヨリ下兵士ニ至ルテ是ヲ修シスベ
 テ武士タルモノ常々ノ心カケテ軍陳戰場ホソレシ
 義ヲ細ク書ツケ其作法進退利害得失ヲ明カニ弁ズ
 丸散手引草 丸散散葉世同ニアルモノ家傳ノ秘方
 追不殘集メ病論治法ヲルルス

和漢軍書目要覧

全

歷代帝王ノ興廢ヲ書ツラ子其間ノ治乱ヲ記ス
 此書ヲ見シハ日本モ唐モ古今ノ治乱其次第一冊
 ニシ見ルハ歴史軍書ヲ讀ム此書ヨリテ讀ハ順次
 月岡丹下畫 全一冊

將全傳

月岡丹下畫

全一冊

武將タル人ヲ百人羅山子撰玉ヒシ
 ライノ終ニアラハレ其行狀ヲ一々ニ記ス

本朝國語

全五冊 權先生東海記ニモル
ルヲ集ノ國々ニテ

日本月令笈

全一冊

正月門委ヲタテルヨリ十二月晦日ニテ年中ノ
イワレヲ記ス

小兒医療手引草

全三冊

五疳驚風痘疹其外諸病極秘ノ妙方ヲ集メ
 ニヤウ治療ノ致カタ悉クシスニ養生達者ニ育ル教
 オクワシクセ悉ク手カナナニシテ俗家ニタカヘ置テ是
 ラ以テ子ヲタテテ葉ヲ用ヒバ万ニツアヤシナシ

敵討天神利生記

全五冊

幼少ノ時親ヲ討テ敵ヲ打得サセ給エト天神宮ヘ身ヲ
 大ケウシテキセイシサレノカニシテテ竟ニ天神宮
 ノ威徳ヲ以テ敵ヲ討テヒタル物語ヲモロキ本ナリ

敵討會替錦

全五冊

諸國ニテアリシ敵討ノ實説ヲ集ム武人ノ義
 深キヲモロキ本ナリ

芋百子

全一冊 イモニ品ヲ色々ノ料理ニ
ツカイ心安クデキル様ニイタシ酒宴ノ一興ニツナフ

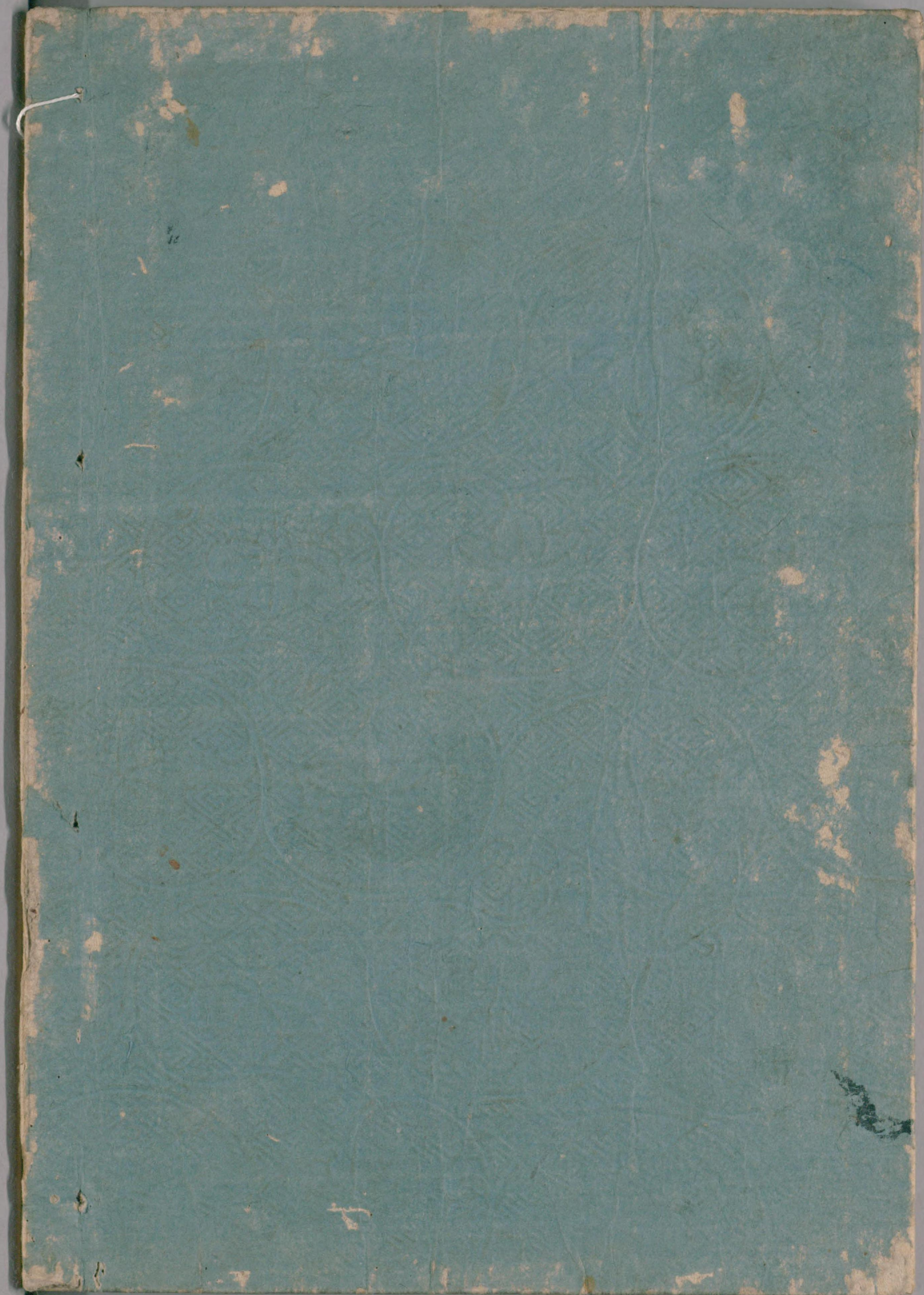
敵討英子傳

全五冊

備前藤江氏ノ子十三支ニテ親ノ敵劔術ノ達人
 甚太左エ門ノ討レモノカタリナリ

特 2230





国立国会図書館 タイトル『妙薬博物筈 7巻』 請求記号 特1-2230

ガラス使用